

# 安齋先生の技術通信

2012年  
5月号



技術顧問・監事  
安齋 正弘 先生

例年より遅い桜前線が北上中。小生の住むさいたま市は4月上旬も過ぎようとしているのにホントに寒い日々が続いています。花見に出かける気にもならない。「暑すぎ・寒すぎ」と最近の気候はやはり少しおかしいですね。「5月の薫風」ナンテ、期待していいのかな？ ところで、勉強、勉強っと。

---  
 今月は屋根の瑕疵について話を進めて参りましょう。この件でのポイントは①雨漏り、②屋根材の剥離飛散等が挙げられましょうか。

屋根の【雨漏り】では基本的に「葺き材」を留めつける為に釘で固定しているのが原因で、通常唯一の防水層である筈のアスファルトルーフィングそのものに孔が開けられています。瓦屋根でも鋼板葺きでもはたまたセメント板葺きでも大同小異です。

特に「棧瓦葺き」の場合には瓦棧をアスファルトルーフィングに留めつけて尚且つ瓦自体を下地に釘留めし銅線で固定するので、アスファルトルーフィングは「釘孔だらけ」なのです。おまけに瓦棧は横(水平)に留められているから雨水の流れを堰き止める邪魔者になってしまい、ルーフィングの風化や雨漏りを助長してしまいます。

最近の防水層は進化しているかも知れませんが、小生の知っているアスファルトルーフィングは結構風化が早く、もろい。以前診断に伺ったある家では、小屋裏に入ろうと天袋の天井板をずらしたとたん、空の明るさが転々と幾つも確認でき、驚いたことがあります。勿論お客様にも確認して頂きましたが、ひどい風化でした。瓦屋根でしたが、葺き替えになったとのことでした。

無論この釘孔は、風や地震による葺き材の被害から守るために已む無くできてしまう「孔」なのですが、以前の屋根下地の「野地板」は現在のように合板ではなく、耳の付いた野地板そのものですから、「瓦棧」の固定すらあやふやでした。

そういう訳で私たちが出くわす診断物件の多くは古い建物なので、特に瓦葺の建物は要注意です。

また、瓦以外の葺き材でも台風等の強い風を伴う雨では、雨水そのものが狭い隙間を移動して屋根勾配と逆方向に遡ります。勾配により上から下へと流れるぶんには、雨漏りを起こす可能性は低いのですが勾配に逆らって雨水が上ってゆくと、下地のルーフィングに水が達します。すると水は釘孔から建物内に浸入することになります。

長尺鋼板葺き等では上記の可能性はかなり低くなると思われませんが、この場合の注意は長年の地震動やゆがみによる「釘頭の抜け出し」です。この部分に「コーキング」が施されていても風化とともにもろくなりますので、特に水付近の釘頭には要注意です。

物理的には「瓦棒」形式の屋根だと葺き材自体からの雨漏りはかなり防げそうです。葺き材(鋼板)の立ち上げ部で瓦棒に横向きに釘止めでき、屋根面に留めつけることはないからです。

それから、水というのは「毛細管現象」により、狭い場所に浸入して予想外の事故を起こすことがあるので要注意です。特に鋼板葺きの「谷」部分での折り返し部分の隙間を、無造作に踏み潰したりして毛細管現象の条件を作ってしまう等、避けなければならない不注意です。

次回は②の「剥離飛散」について考察してみましょう。

技術的なご相談はこちらへ！ メール：question@mokutaikyo.com TEL：03-5909-1881